

# LEADERSHIP CHALLENGE

## 大隈塾LCLレポートvol.01

大隈塾リーダーシップ・チャレンジは4月14日（土）15日（日）、2018年度第1回の講義を開催いたしました。

初日は大隈塾ファウンダーの田原総一郎、塾頭の駒井正義。そして2日目はライフネット生命保険から立命館アジア太平洋大学の学長になられた出口治明さんでした。

### 4月14日（土）

**13:00～13:10 オリエンテーション（大隈塾の説明）**

**13:10～14:30 第1講**

**講師：田原総一郎（大隈塾ファウンダー）**

**テーマ：「大隈塾とはなにか」、仕事で一皮むけた瞬間「塀の上を走るきっかけ」**

**14:40～17:00 第2講**

**講師：駒井正義（大隈塾塾頭、三井物産前副社長）**

**テーマ：仕事で一皮むけた瞬間「会社の中でどう楽しく、面白く生きるか」**

### 4月15日（日）

**09:00～10:30 第3講**

**講師：出口治明さん（立命館アジア太平洋大学学長）**

**テーマ：歴史を学ぶ「先人に学べ、そして歴史を自分の武器にせよ」**

**10:40～12:00 グループディスカッション**

おかげさまで、無事5年目の大隈塾をスタートできました。ありがとうございました。

今年は、受講生数22名と、これまでで一番の大所帯となりました。しかも、名古屋、大阪、福岡、熊本（初回欠席）からもご参加いただき、合宿型研修の強みも発揮できそうです。初回からみなさん闘志みなぎりっており、ファシリテーター役の田原総一郎が促さなくても積極的に挙手・発言が相次ぎました。2回目の講義では駒井塾頭がやる気十分、自分の体験的リーダーシップのプレゼンテーションを120分、質疑応答に20分費やしました。

2日目の出口治明さんの講義でも果敢に質疑応答で出口さんに挑んでいきました。大隈塾5年目の今年度もまさに「リーダーシップ・チャレンジ」となりそうです。

## 【第1講】

講師：田原総一郎

テーマ：「大隈塾とはなにか」、「塀の上を走るきっかけ」

日本は非常に面白い国。資本主義のようでいて、資本主義ではない。金利はマイナスだし、投資が増えそうなものなのに、投資が増えないから資本も増えない。なにより、マルスクの『資本論』でいえば、労働者と資本家は対立するはずだ。しかし、日本では対立しない。対立しないから、同一労働同一賃金が実現しない。この制度は、非正規雇用と正社員の給料を、少なくとも時給レベルでは同じにしなければならない。しかし、会社はそうしないし、そうしない会社に対して、組合も文句を言わない。なぜか。日本の労働組合は、正社員のための組合であり、非正規を会社に対して守ろうともしない。御用組合と言われるわけだ。組合と会社が「一体化」している。

組合と同じく、働いている社員も会社と一体化している。だから、個人としての意見が言えない。東芝で粉飾決算があり、三菱自動車でデータをごまかしが起ころ。

行政も政治と一体化し、司法も政治と一体化している。森友や加計の問題が起ころし、記録もなくす。公平も公正も、担保されない。森友学園の責任者は逮捕拘束し、東芝の責任者は罪に問われない。

一体化でいえば、チャレンジできない、ということも問題。人工知能の研究は、日本は世界に3周遅れている。経営者が技術者、研究者にチャレンジさせない、研究に投資しない。なぜなら、社長は失敗が怖いし、新しいことを始めて敵を作りたくない。だから、守りの経営になる。

リーダーの条件は、困難な状況でも面白がる事が出来る人間になること。サントリーの新浪剛史さんはローソンの社長時代、ローソンの何が日本一になるか考えた。おにぎりだった。おにぎりをとびきり美味しくして、店員にプライドをもたせた。

セブン-イレブンの鈴木敏文さんは、おでんを美味しくしたし、夏でもおでんを売れるようにした。

京セラの稲盛和夫さんは、JALを復活させた。3人とも、同じ手法ではない。誰もやらなかったことをやった。

私が今まで好き勝手に仕事のできたのは、好奇心を絶やしていないから。だから、どんなことにも興味を持ち、一次情報を集めて分析する。初めての人と会うときは、その人の情報を集めて、「こんなことまで知ってるのか」と相手が思ってしまうまで知っておく。そうしないと、有益な情報はとれるはずがない。徹底的に調べ、活用して、「この人といっしょにいると面白い」と思わせること。そして、一つのことを一生懸命にやる時代ではない。たくさんのことやる。ホリエモンは「多動力」だといっている。これも、好奇心がスタートになって、いろいろ情報を集め、チャレンジしていくことで「多動力」がついてくる。

## 【受講生のレポートより】

面白い経営者として、話を聞くことが上手い人、話を引き出せる人ということに触れられていたが、非常に重要な要素と思う。特に経営陣は限られた時間で多くの情報が日々入るため、的確な情報の引き出しが必要になることから納得がいく。



=====  
「自分がやりたいことであれば、いつまでも働ける」。この10か月のカリキュラムの一発目に、まず自分が仕事を楽しめているかどうか考えなさいというメッセージをいただいたと感じている。

=====  
何事も楽しむ・面白がる・興味を持つという事が重要だと感じた。徹底した現場主義、face to faceで会話する事で情報のqualityも上がり、高度な情報社会でも感わされず、本質を見極められる力が付くのだらうと思った。これは中堅リーダーに留まらず、経営・若手など夫々のレイヤーに共通する事であらう。自分自身も何かとネットからの情報収集割合が多いが、改めるべき点だと感じた。

=====  
「リーダーシップとは難しい問題に直面した時に面白がれる人」という言葉に強く感銘を受けた。頭では理解できるものの、実際にこのようなマインドで働ける人は少ないと思う。普段から何事にも好奇心を持ち、楽しみ、行動するからこそこのようなマインドを持てるだらうと感じた。

=====  
「知識を持つことが強みとなる」  
・知識を蓄えていくことで、自分の中の引き出しが増え、自分に自信もつき、人の話もきちんと聞けるよらなスケールの大きな人間に成長させる手助けとなると気づきました。

特に、徹底的に自分で調べるということはインターネットのよらな嘘と真実が混じった情報が氾濫する現代では目の前の情報を鵜呑みのしてしまうのではなく、自分で判断できるよな基準を持つことに繋がる感じます。

=====  
「多動力」と「一次情報」の大切さに改めて気付かされた。銀行営業に従事する中で、ややもすれば他と同じくらいに出来ていればいい、独特の発想やビジネスは誰も求めていない、等とまさに「同質化」（「均一化」・「安定思考」）に安住して諦めている自分がいないか、自問自答してしまう。

=====  
一体化するとチャレンジできなくなる  
「日本のサラリーマンは個人としての発言ができない」という言葉は衝撃的であつた。しかし、講義を聞いている内に深く納得した。一体化することにより、輪を乱したくない、敵を作りたくないという心理が働き、チャレンジすることができなくなるということを学んだ。



## 【第2講】

講師：駒井正義

テーマ：「会社の中でどう楽しく、面白く生きるか」



大きく6つのフィールドで話をします。

①会社に入って、どうやったら生き生きと、面白おかしく生きていくのか。これが全編を貫くテーマであります。

②リーダーシップチャレンジにふさわしく、良いリーダーに必要なこととは？

③30代～40代頭のみなさんがどういった勉強をするべきか。

④組織は怖いところだという話

⑤人間とは、幸せとは、豊かさとは？

⑥偉くなるということは、どういうことか。偉くなるためにはどうしたら良いのか。

僕は、三井物産の筆頭副社長まで上り詰めたわけですが、社長になることがなかった。なぜ、なることがなかったのか。理由は非常に明確でありまして、会社に入って一度たりとも「社長になりたい」という強い意志を持つことがなかったからです。では、なぜ社長になりたいと思わなかったのか。これは単純明快な答えがあります。私が三井物産に入ったのは昭和48年、その頃の物産はいまより社会的なステータスが高かった。三菱商事と並んで、日本を代表する会社でした。そんな会社に早稲田を卒業して、入っただけでも有頂天になっている。その当時の社長は、伝説でしか聞いたことがないような雲の上の人だったからね。

ぼくはそこで昇進して行くわけですが、その瞬間にも社長どころか、役員になると想像することさえなかった。つまり、社長になろうと思わなかったので、当然社長になる話も来ないわけですよ。では、社長になる人はどういう人なのか。同期のトップで役員になったと時に、「俺は社長になってやる」といった際立って強い意志を持っている人です。では、その差はどこで出てくるのか。社長になる人は、自分の行動を厳しくコントロールし、日頃の行動をbehaveしていきます。僕は、そういうところがありませんでした。

じゃあ一体、三井物産に入って、どんな生き方をしようと思ったのか。それは学生時代にすでに確立しており、会社に入った時には「信念」に変わっていたものです。それはなにか。

「物産に入ったからには、物産の誰よりも面白おかしく、誰よりも生き生きと生きてやるんだ」という考え方を持っていたわけですね。つまり、面白おかしくやった結果として、僕は副社長になったわけです。

一步深く定義に落とし込みます。ここからいう4つの条件を満たした時に、「生き生きと生きている」と言えます。

①心身ともに健康でなければいけない。これは、並のレベルの健康ではダメです。うまいもんを食って心の底から「ああ～！うまいな！！」と身体が感じる。街を歩いても身体が軽くて思わず小走りしてしまう。「あいつなんであんなに元気なの？」と言われるレベルです。次に、精神面の健康。美しいもの、素晴らしいものを見たとき心の底から「生きてきてよかったな！」と感ずること。フェルメールやダリの絵を見、またいい音楽を聴いた時に、心が揺さぶられること。このような状況に心があるとき、最高の状態であります。

②これは、一番重要な条件であります。しかし、一番難しい条件であります。言いたいことを言って、やりたいことをやっているか。一回や二回はさほど難しい話ではありません。しかし、組織の中で言いたいことを言い続け、やりたいことをやり続けることは、大変難しいです。なぜか。それは言っていることが組織において正しい事ではなければいけないからです。それから、やりたいことをやり続けるためには組織が期待する成果を伴わなければいけない。よって、大変難しい。相当の努力が伴います。

③次に、承認の問題です。上の人に信頼される。同期から一目を置かれる。自分より下の連中から尊敬される、あるいは憧れの目を持って見てもらえる。

④自分のやることが、自分自身の自己実現につながっているかどうか。あるいはその方向を向いているかどうか。

この4つの条件を満たしているときに、その人はその組織の中で、誰よりも最も面白おかしくやっている、生き生きと生きていると言えるわけです。現象面においては、週末より月曜日が待ち遠しい。早く会社に行きたい。役所に行きたい。これがベストのコンディションです。

最後に伝えておきたいことが、7つあります。

1つ目、組織に入った以上、どんなことがあっても偉くなってほしい。

なぜならば、

①自分が駒として動かされるという立場よりは人を動かす方が面白い（＝生き生きと生きられる）

②自分の価値基準を会社の価値基準にできる。（しょうもない部長がいた時に、それに従うしかない。であるならば、自分がその立場になって変えれば良い。つまり、自分が課長になって課を良くする、部長になって部を良くする。このように自分の価値基準を会社の価値基準に置き換えるには、偉くなるしかない。よって、偉くなるべきである）

2つ目、偉くなるには、強い意志を持ち続けることが一番重要なポイントです。具体的にいうとどういうことか。金メダルを取った羽生結弦選手、そして小平奈緒選手の話をよくします。彼らは何をしたか。勝つために正しい努力をしましたよね。たとえば小平選手は、スピードを上げるために何が必要かという体系的な勉強をした。それを練習で確認し、勝負する前には万全の準備をして望んだ。あの努力、並の人にはできない。じゃあ、ものすごい大変な努力を支えるものは何なのか。それはまさに「強い意志」そのものであります。よって「強い意志」を持つことが重要なのであります。

3つ目、どういうポストにつくのかは、勉強量に比例する。また、ツキ（運）にはどういうメカニズムがあるのか。ツキは努力の総量に比例する。要は、一生懸命頑張っている人にしか、ツキはこないのであります。

4つ目、偉くなろうと思ったら、修羅場を経験するしかない。修羅場がきたら、「おっ！いよいよチャンスがきたか」くらいに受け止めていただきたい。なぜ、修羅場を経験すべきか。まず、そういう状況になつてこそ、誰が自分の敵で味方かわかるわけでありませぬ。次に、修羅場は理不尽な中で起こります。自分一人では乗り越えられませぬ。先輩上司や下からの力添えがあつて初めて問題が解決します。このことによつて、自分自身が謙虚になります。最後に、乗り越えていく人を下は必ず見ている。そして、組織は非常に強いものになつていく。よつて、修羅場がきたらチャンスだと思つてください。

5つ目、人は必ず見ている。「こつだけ頑張つているのを見てくれていない」と思つてもいいけれど、正しい努力は誰かがどこかで必ず見ている。努力は、短期的であれ長期的にであれ、100%報われる。それは事実であります。

6つ目、スランプになつたら、絶対にバタバタするな。どつどつ蟻地獄に入つていく。身を縮めてひたすら勉強するしかない。次のチャンスに備えよ。野球の例でいうと、ずっと打つていたバッターがいきなり打てなくなる。その時は、2軍に降りて、ひたすら素振りをして。できたら、無心になるくらいまでやれ。無心になつて努力しているときに、「気づき」がおりてくる。グリップの位置がこつこつじゃなかつた、ということに突然気づくのです。

7つ目、いいリーダーになるための条件は何か。一つに集約しろと言われたら「絶対的な会話力」を持て、と。これは3つの要素で構成されています。①聴く力（相手から本音を引き出す力）。②コミュニケーションの嵐を巻き起こす力。③言葉力（わからせる力、人を動かす力）。「絶対的な会話力」はどうやつて作れるのか。勉強であります。でも、普通の勉強ではありません。重要なことはいくつかあります。できるだけ多くの人と出会い会話をせよ、旅をせよ、自然の中に身を置き、風の音を聞け、本（小説）を読め、芸術にふれろ、そういったことすべてであります。それはどういふことか。自分の引き出しを増やすことであります。

そして、いいリーダーは、いい教育者であります。教える人を自立させる人です。そのためには、何が必要か。「愛」ですね。「愛」は自己犠牲を伴います。自己犠牲とは何か。「時間」です。だから僕は、部下を育てるのに惜しみなく時間を使います。



おまけに気に入つているフレーズをご紹介します。

「平凡な教師は、言つて聞かせるだけ。良い教師は、それに加えて説明をする。優秀な教師はさらにやつてみせる。しかし、最高の教師は、生徒の心に火をつける。最高の教師は、生徒の心に火をつける」（アメリカの教育者ウィリアム＝ウォード）

さて、みなさんの心に火はついたのでしょつうか。

## 【受講生のレポートより】

組織の活性化はコミュニケーションの総量と比例。活性化のためには、リーダーには「絶対的な会話力」が必要。そのためには「自分の引き出し」をできる限り増やす。

まさにこの2日間で自分が感じた弱みであり、自分には「絶対的な会話力」の根本となる引き出しが不足している。業務上の知識だけでなく、広い見識を持つことでコミュニケーションを巻き起こし、その中で業務も円滑に進められる存在になりたい。

=====

- ・平凡な教師は言って聞かせる。
- ・よい教師は説明し、優秀な教師はやってみせる。
- ・しかし最高の教師は子どもの心に火をつける。

この言葉が一番刺さりました。ウィリアムウォード。少なくとも私は優秀な教師どまりであり、相手に伝えて理解することが一番大事だと思ってました。でも違う、確かに相手に火をつけることがもっとも頼りになる存在を作るために一番重要です。

=====

講義の中で、「正しい努力」「正しい勉強」という言葉が何度も出てきた。「正しい」というのは、「自己満足ではない」と言い換えられるのではないか。即ち、自身で努力しているつもり、ではなく、目の前の仕事から一歩引いた時に、必要だと感じる努力・勉強である。自身を振り返ると、どうしても目の前の仕事を片付けるための努力・勉強ばかりに目を向けている。「正しい努力」「正しい勉強」を考え、実行していきたい。

=====

モチベーションの維持はどう行おうか?の問いに、駒井氏は「格好良くありたい」という表現をされた。「格好良くありたい」という一言には、駒井氏の「大言壮語と有言実行」「正しい努力を行う」等、多くの信念が詰まっていると思う。自分はどうかありたいのか、改めて考え、口に出し、実行する。そしてその実行を確実なものにするため、弛まず勉強していく。

=====

イキイキとする条件の1つとして挙げられた「言いたい事を言って、やりたい事をやっている」が非常に難しいと私も痛感しております。「組織の中において正しいものでなければならない」、「組織の中において期待される成果を残さなければならない」、これを実践する為には「正しい勉強」、「正しい努力」をし続ける事が非常に重要と理解致しました。

=====

## 「楽しむ為には努力が必要」

駒井さんの講義を受け、改めて気付かされた事は、これだった。

偉くなれば自分の価値基準を会社の価値基準と出来、結果自分自身が楽しいと思う事が出来る。ではどうやったら偉くなれるのか。それには努力が必要、しかも正しい努力、体系的な勉強が必要。私自身、自分が置かれた環境において、誰よりも楽しんでやろうと言う事は常に考えている事である。その「楽しむ」と言う質やレベルを一段も二段も上げるヒントがここにあった。頂戴した様々な言葉と共に、「楽しむ努力」、続けて行こうと思う。

## 【第3講】

講師：出口治明さん

テーマ：「先人に学べ、そして歴史を自分の武器にせよ」

2011年の東日本大震災のような大地震が、今後起こると思う人は手を挙げてください。(全員手をあげる)

では、東日本大震災の教訓を学んだ人と、まったく学んでいない人と、生き残る確率が高いのはどちらかと思いませんか？

今日の講義のテーマは「歴史から学ぶリーダーシップ」です。将来は何がおこるかわかりません。だから過去の歴史を学ぶ必要がある。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」のです。ビスマルク、人生50年の時代から言われていたことです。でも歴史は何万、何千年ってありますから、昔の人はビスマルクでもさえもたくさんの時間軸の中から学ぶことができたのです。

近代の産業革命後の、高度産業社会は3つの要素から成り立っています。「化石燃料、鉄鉱石、ゴム」です。飛行機や自動車を見れば一発でわかりますね。この3つを持っていれば自国ファーストでやっていける。これが現在の世界です。アメリカがあのように好き勝手やれるのはこの3つを保持しているからです。では、この3つを持っていない国はどうすれば良いのか？答えは簡単。他国と交渉をするしかないですね。アメリカもロシアも自国ファーストをやっているが、日本はそれをやる権利がない。会社にも言えることですが、戦略も交渉も自分が与えられたカードの中でしかできない。日本は他の国々、他国の人々と仲良くやっていくしかない。そのためにはコミュニケーションが必要になりますよね。

コミュニケーションがうまくいくかどうかは、とは共通テキストの数で決まります。外国人が浦島太郎や、桃太郎の話をしてもらってもわかりませんよね。浦島太郎や桃太郎はたとえ日本人同士でも共通テキストがなければ全く伝わらないのです。最強の共有テキストはデータです。「数字、ファクト、ロジック」は国を超えて理解することができる。なので、コミュニケーションの根本は数字、ファクト、ロジックです。人々はエピソードを語りがちですが、エピソードではなくエビデンスがとても大切です。

日本経済は悪いに決まっている。アメリカは異常な国です。覇権国で人口が増え続けている国はない。アメリカはずっと増えています。石油をもっているのに。日本とアメリカはそもそも比較対象になりません。アメリカのベンチャーの半分以上は外国人が興しています。ケミストリーがうまく混ざればイノベーションが生まれます。日本は国土がせまく、資源もない。アメリカはその逆ですよ。ヨーロッパのほうが日本にとって良いモデルになります。アメリカではありません。

人間は見たいものしかみません。昔の人はどう考えたのかをよくみれば、これからの事態にうまく対処することができます。例えば、夫婦別姓。北条政子の例をみれば、明らかに夫婦別姓ですよ。なのに、日本では夫婦別姓に対して根強い反対意見がある。過去から学ばず、単に夫婦別姓が日本の伝統ではないという輩は見当違いです。それを批判する人は歴史の縦横のファクトを見てないのです。これはもう愚かとしか言いようがありません。

ヨーロッパではオールサポーターオールです。





若者が年寄りを支えるべきだという日本の考え方が異常なのです。だから消費税がヨーロッパでは発達します。

少子高齢化とは「所得税と住民税→消費税とマイナンバー」というパラダイムシフトです。先進国は3つあるアメリカ、ヨーロッパ、日本。どこが一番弱者にやさしいか。もちろんヨーロッパです。ヨーロッパは一番消費税が進んでいますね。介護を減らすには健康寿命を延ばすべきです。健康寿命をのばすには、働くしかない。医療年金財政はもらうほうから払う方になります。

子どもか仕事かと言っているのは日本だけです。フランスをはじめヨーロッパはみんな出生率がV時回復しています。子どもは女性が産みたいときに産むのがベストです。産みたい時と女性の経済力が一致するわけがない。だからこそ行政側のサポートが必要なのです。

ヨーロッパでは、待機児童もいません。フランスからすれば、少子高齢化なのに待機児童がおきてしまう日本を理解できない。幼稚園の所管が文部科学省で、保育所は厚生労働省だからうまくいかないんだ、と。それなら安倍さんが、「文科厚労省をつくるぞ」といえば一発で解決します。

サービス産業はアイデアが勝負なので、長時間働いてもいいものが生まれるとは限りません。「人、本、旅」というように、新たな知識に出会う必要があるのです。工場社会ではスティーブジョブスはいらないのです。生まれもしません。しかし高度なサービス産業ではスティーブ・ジョブスがいないと勝てないのです。日本はやっとこれに気づいて、働き方改革をすすめました。

次にサービス産業の購入の主体者は女性です。だから欧米はクォーター制度を作って、半ば無理やりにも女性を上に行かせて、主体者のマインドを強くします。いまの経済は、女性が考え、女性が買うというマッチングこそが本質です。しかし日本はどうでしょうか。おっさんたちが「女性目線」で商品を語るといっておかしな現象が起きていますよね。2000時間を働いて1パーセントしか成長していないのが日本です。これが日本の課題です。

#### 【受講生のレポートより】

「運」「タイミング」「偶然」「先天性」などの所与の条件を受け入れる。

グランドデザインを描いて時代を変えるような「天才」は天賦だとしても、必ずしも世の中で活躍するためには天才である必要は無く、「自分がやりたいこと」があれば、それに向けて「自分ができる役割」を高めていけば良い。そのように頭の整理を行うことができれば、自分が自分らしく社会や会社という組織の中で活躍する方法を見出すことができるのでは、と感じた。



=====

世界経営のサブシステムについてはまさしく自分が仕事をする「意味」に繋がると感じた。自分の現在のポジションを把握する上でも上記を考える事は有効な手段だと思う。

「この世界をどのようなものと理解し」、「どこを変えたいか」「自分はそのどの部分を担うのか」自分は鉄鋼業界に所属している。個人的には好きな業界であることから鉄を通じて社会をより良く・豊にする一旦を担う。どこかの企業キャッチフレーズみたいであるが、先ずはこの辺だろうか。

=====

講義全体を通じて、過去を振り返って次のアクションを実施すること、振り返るときはデータに基づき客観的に実施すること、この2点に集約されていると感じました。過去を振り返るためのデータを蓄積するという観点において、何を測定するか、もとても重要であると感じました。もう一点、「人・本・旅」とても好きな言葉になりました。いろいろなことを経験し、人生の幅を広げることが仕事の幅を広げることにも繋がると思いました。自分だけではなく、配下メンバーにも共有したい考えです。

=====

出口さんのお話から、自分が知らない歴史の面白さを感じる事が出来ました。「歴史」と「数字・ファクト・ロジック」の掛け合わせで、自分が今まで持っていた価値観が一気に崩れ、視界が広がったように感じました。自分の無知を痛感する反面、これから学んでいく事に対して非常にワクワクしました。また、得意なことを頑張ればいい、人間は得意な事ではしか貢献できないという言葉が非常に印象的でした。私自身、自分の得意な分野を伸ばし、世界のサブシステムに貢献していきたいと思えます。

=====

「人・本・旅」から学ぶ姿勢を、愚直に、真摯に、コツコツと継続することの大切さ、過去に出口さんの本を読んで同様に感じていたものの、出来ていない自分を改めて反省する機会となった。個人的に歴史は好きだし、職業柄データ・ファクトで説明することは必須であるし、それらを論理的に（タテ・ヨコ）展開することは誰しも求められる事と分かっているながら、なかなか実行に移せない自分。まずは、今回の大隈塾の期間を通じて、読書をする習慣を身に着けたいと思う。

=====

#### 「世界経営計画のサブシステムを担う」

講義でも著書でも、一番に印象に残ったのはこの言葉である。メインシステムは神様しか担えない、だけど、自分の周りを、自分の役割で、少しでも良くしようという世界経営計画のサブシステムを担うことは、即ち自身が社会の中できちんと役割を与えられており、尚且つそれを果たす責任があると理解した。自分は、社会の中でどんな役割を担っているのか。再考し、自ら行動して世界を変えたい。

=====

社会のあるべき姿、全体像を意識しながら、自身の置かれている課題に向き合うことの重要さに気付くことができた。日々の仕事に追われていると、自身が取り組んでいることの社会的位置付けや歴史のダイナミズムの中で位置付けについて意識することをつい忘れてしまいがちであるが、常に、社会の中での位置付け（ヨコの位置付け）と歴史の中での位置付け（タテの位置付け）を考えながら、自身の課題に取り組んでいきたい。



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.01

2018年5月4日発行（通算42号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-19 アーバンヒルズ早稲田207

tel:050-3558-7527

mail:ookuma\_school@stonesoup.tokyo